

私の頭の中のまだエンピツ④

そだちと臨床研究会 川畑 隆

自分で考える

客観的とは誰の考えか

世間では「主観的」は「自分勝手」ともつながり、「客観的」に比べてこれまで分がなかったように思いますが、どうでしょうか。でも最近、「主観的」を地でいってるように見える大国の大統領のおかげで、「主観」が勢いを盛り返してきています。「客観的」な見解だと理解してうなずいていたこと（「常識」と言い換えていいかもしれませんが）が実はそうじゃないんじゃないか、いや、そうじゃなかったんだと思わせられる圧力のうなものが、極端な形で顕わになってきているように思います。

「客観」を誰しもそう思うような見解だとして、そのような見解がそこにまさに客観的に自分の足で立っているわけではありません。「客観的」だとそれぞれの人が「主観的」に理解してきたわけで、現状は「客観」に支配されがちだった「主観」の部分が大きく揺さぶりをかけられているとも言えるのではないでしょうか。そういう意味では件の大統領は「主観」の解放の先駆者かもしれません。

しかし、先ほど「極端な形」と書きましたが、「主観」の解放が「ウ

ソ」でも何でもありとなり、個人の好みがそのまま公的な政治を左右するとなると、やっぱりまずいわけです。でも「ウソ」と「ホント」が明確に分けられることもあれば、見方によってかわったり、どちらかわからないこともある世の中で私たちは生きています。

…ということは、「主観」すなわち一人ひとりの考えが今また問われているのだという現状認識は的外れではないように思います。…この物言いは私の主観が客観化を求めている、「いや、その現状認識には異論がある」という相手も含めた交流への期待を含んでいると言えます。

「自分勝手」はあまりよい意味では使われません。しかし「自分にとつて使い勝手のよい」「自分自身になじむ」言動を指すのだとしたら無理のない自分をめざすわけで、「主観か客観か」ではなく「主観も客観も自分の中でバランスよくブレンドされた状態」をどう目指すか、そこでどう他者とつながるかということの価値を含んでいるように思います。

操られているか

先ほどの大国の大統領について、ある国際政治評論家が「〇〇の操り人形になっている」とテレビで発言したのを聴きました。〇〇は人名ではなかったと思うのですが、私の勘で、その大統領についてよく言われている「ポピュリズム（大衆主義）」を入れてみました。「ポピュリズムの操り人形になっている」…フムフムと納得しました。「大衆は本音ではこう考えているんだし私もそうなんだから、そこを何でも取り入れていきたい、それが人民のための政治だ」という「客観を装った主観」とでも言えるような認識が主導権をもち、目の前の一つひとつの現実吟味によらずに何で

もそれですませてしまうような事態が描写されているように思われました。そのフレーズがなぜ私の耳に飛び込んできたかは、私が「操り人形」ということに敏感だからですし、操られるのが嫌だということは自覚しているつもりです。とは言っても実際は操られているかもしれませんから、自分への点検項目のひとつとして準備されています。

そして今回、テレビから聞こえてきた言葉が刺激となって、「実は私も操られているんじゃないか」：そんな不安が私の中に生じたのです。

対応への疑義

私が属する「そだちと臨床研究会」が定期的に開催している『対応のバリエーション勉強会（以下、対バリ）』の実際の様子を、ある家族支援に関する研修会の演台で、研究会メンバーが実践形式でプレゼンテーションしました。その中で、子どものことで来談しているロールプレイ家族に対して面接者役のメンバーのひとりが行った対応（質問）が、その後、メンバー間で話題になりました。

対バリの趣旨は、「支援現場のいろんな場面における相手への対応には正解があるわけではないので、ロールプレイで行われた対応のよいところを探しながら役に立ちうまくいく対応を検討しよう」というもので、勉強会ではロールプレイだからできるいろんな対応を試してみることも含めて参加者に促しています。

話題になったのは、対バリの紹介を目的としたロールプレイ場面での面接者役の対応だったのですが、それは「役に立ちうまくいく対応だなあ」と参加者に明確に見えたわけではなく、「不思議」で「不可解」に受け取

られた可能性があるものでした。もちろん、フロアのかたがたには「対応に正解はなく試してみたらよい」という対バリの趣旨を伝えた後でのプレゼンテーションだったのですが、それでも「役に立ちうまくいく」「よりよい対応」だと即刻思えるような対応を期待し想定していたかたがたとっては意外だったかもしれません。メンバーの中からも「秀でた対応だった」と大多数が思えるようなプレゼンテーションのほうがよかったという意見が出たくらいでしたから。

「正解はない」のはホントか

私の中で立ち上がった不安は、プレゼンテーションとしてどうだったのかという点を離れて、対バリそのものについてでした。

「対応に正解はないから…」と対バリの意義について述べているのに、その私たち自身が「よりよい対応」「秀でた対応」という「正解」を想定しているのではないか、「正解はない」と言うために「正解はない」と言っているのではないかという疑いが、私の中であらためて出てきたのです。「あらためて」なのは、それまでも気にはなっていたからです。

正解があるとする、その正解に近づくために不正解を正すというアプローチが出てきやすくなります。そして、そのアプローチは批判に直結します。私たちが当初対バリにロールプレイを用いることになったときに、この批判が検討の対象になりました。ロールプレイに尻込みする人が多いのは、せっかく頑張ってロールプレイしたのに批判されて辛かったという経験があるからではないかと考えたのです。ですから、他のメンバーのロールプレイの内容について批判するのではなく、その人のプレイのよ

かったところに限定してコメントするというルールを導入しました。

さて、このルール下ではメンバーの中に生じた批判心は表出を抑制され、賞賛のための賞賛も出てくる余地が増えることにもなります。ですから批判されたかもしれないプレイヤーと批判を抑制したメンバーの双方にとって、批判によって得られたかもしれないメリットを逸した部分はあるかもしれません。しかし、いったんある点に批判心が向けられるとそのプレイの評価がそこに張りついてしまう可能性があります。そしてそのことによって批判ではない視点、賞賛されてよい視点が葬られてはもったいないことになります。つまりロールプレイした人の中に潜在的にもある支援力を掘り出し、ロールプレイを観たメンバーはその掘り出す力を養うチャンスを作りたいと考えたのです。私たちは、批判によるデメリットを回避することと併せて、このメリットを選択したわけです。

ただ、このどんな対応にもよいところはあるという視点を補強するために「正解はない」とまで見解をスライドさせた側面があり、私の中に少し「言い過ぎている」のではないかという惑いが残ったようです。かと言って「正解はある」と思っているわけではありません。前号で述べた「確かなどころ」に少しでも近いかもしれない「確からしいところ」を手に入れたのと同じように、「こういう時には大体こう対応するのがいい」と言えるようなものはあるのだと思います。しかし、その個々の対応場面には唯一無二の諸要素があるのですから「どんな時にもこれが正解だ」と言えるものはないと、これは確かに言えるのだと思っています。

今回は若干の今回の続きと、「ものごとをポジティブに捉える」という考えにも操られていないかと、考えてみることにします。

(了)